

# 深思北京

2017年度中国語上級・北京研修報告集



東京大学トライリンガル・プログラム (TLP)

## 2017年度 中国語上級・北京研修——深思“北京”

中国の文化と社会を知るために、北京という場所でなにができるだろうか。

北京は中国の首都であり、政治の中心です。政治の影響力の大きさを考えれば、ある意味では経済の中心とも言えます。そして、現代アートに代表される新しい文化発信の中心であり、京劇に代表される伝統文化の中心でもあります。「老北京」と呼ばれる独特の文化が今も残っています。北京はじつにさまざまな顔を持つ、重層的な場所です。

この北京の地を舞台に、これまで学んできた中国語の力を試す現場で試す、それがこの中国語上級・北京研修——「深思北京」です。「深思北京」と名づけたのは、参加する学生の皆さんに、北京がもつ重層的な姿を体験し、考えてほしいと願うからです。

東京大学では、トライリンガル・プログラム (TLP) を前期課程で実施しています。英語と日本語、そして中国語に堪能な学生を育てるこのプログラムは、後期課程でも後期 TLP を開講しています。この北京研修も後期 TLP と連携した活動となっています。この研修の運営は、教養教育高度化機構国際連携部門のリベラルアーツ・プログラム (LAP) とグローバルコミュニケーション研究センター (TLP 担当教員) が担当し、中国人民大学文学院と北京戯曲評論学会のご協力をいただき、北京で開講されました。北京では、中国に関する講義や学生交流、政府機関や中国企業の見学や関係者との懇談が行われ、「北京」を体験し、中国語の応用力を磨くとともに、中国を重層的に考察する充実した一週間となりました。使用言語は中国語のみとし、日本語は原則禁止です。

今年度のプログラムには学部二年 2 名、三年 3 名、四年 1 名の学生が参加しています。そのうち 1 名はこの 2 月から中国の北京大学にて留学し始めます。

本冊子は、2017 年 11 月 12 日から 19 日の一週間における、東大生の北京見聞録であり、北京という新しき古都に対する思考集でもあります。

2018 年 3 月

# 目次

はじめに

1

スケジュール

2

活動報告

不以既定形象判断国家的重要性

松尾健司

5

中国から学ぶ、伝統文化と国際交流への姿勢

戸田理沙

10

文化、政治の中心・北京を訪れて

衛藤 健

14

現代社会における  
伝統芸術としての京劇のありかたについて

村上陸人

17

北京での活動を通して何を見たか

三谷怜司

20

日本人から見た中国文化の魅力についての考察  
— 研修で見たもの聞いたものを中心に —

石川和綺子

26

現地メディアによる報道

31

【付録】

写真集

執筆者一覧



## はじめに

「深思北京」としては四回目、私としては初めての海外研修が、今年度もこれまでと同じ中国の北京市で、一週間の日程で実施されました。

今回の北京研修は一人の病人も出ず、天候にも恵まれ、計画通りの研修をこなし、日本国内では体験できない数多くの体験を積むことができました。これは、各先生方のご指導、中国人民大学文学院や北京戯曲評論学会の方々のご協力や細かな配慮のおかげだと思います。特に、北京戯曲評論学会の方々は、学生たちが快適に滞在し、有意義な研修ができるよう何カ月前から準備してください、滞在中は各機関・企業と連絡を取りながら、お世話をしてくださいました。心からお礼を申し上げます。

十一月十二日（日）に羽田から期待と少しの不安を抱えて学生たちと一緒に北京へと出発しました。入国審査場で並ぶときから学生たちはすぐに中国語モードに切替え、中国語応用を始めたのです。初日ですが、まったく疲れた様子なく、文化・経済・政治等関心のある話題についてどんどん話していました。これから一週間の活動をとっても楽しみにしている様子でした。

最初の二日間は中国人民大学文学院との交流です。学部生と大学院生の授業に参加し、普段と違う授業体験をすることができました。東大で勉強して身に付いた中国語力をフルに発揮し、言語・文化・戯曲等さまざまな分野の知識を得ました。一方、頤和園見学や中日学生交流会、学生同士間の交流も深まっています。

十一月十五日～十八日は、北京の各機関・企業を見学したり、中国文化に関する講座を受けたりしました。そこで、学生たちは

時に日中医療制度の違いや技術・先進機器等に驚き、京劇・芸術等の奥深さに感心し、時に中国人の視野・見解に共感をしました。きつと新しい知識・見解をいっぱい得たでしょう。

実は今回、毎日ほとんど朝八時出発、夜八時半ホテルに戻るというぎつしり詰まった日程でした。それにもかかわらず、学生たちは每晚ホテルに戻ったら必ずに自主的に勉強会を行いました。当日得た知識や感想等を共有したり、翌日訪問する機関・企業や受ける講座について勉強し、聞きたいことを考えたりします。その姿を見て、本当に感心しました。彼らは将来、きつと未来を担う素晴らしい人材になると信じています。

一週間というのは決して長くない期間ですが、この限りのある時間に、たくさんの方々にお会いしました。みんな親切な方ばかりで、私たちに多くの知識を教え、さまざまな質問に答えて、また人生経験もいっぱい教えてくださいました。私も学生たちと同じように、今回の研修を通して、いろいろなことを体験し、考えました。北京に対しても新しい印象を受けました。本当にありがとうございました。

若い時期に、違った文化や民族性にふれる、すばらしい先輩方から知識や経験を教えてもらうことはきつと、大きな意識革命にもつながる貴重な経験になると思います。一時的な感動に終わらせることなく、これから先の自己育成や進歩につなげていってくださることを心から願っています。

## スケジュール

	午前	午後
11月12日	東京出発	北京到着 北京戯曲評論学会による歓迎会
11月13日	中国人民大学文学院 徐楠副教授：語言文学引論	頤和園見学
11月14日	中国人民大学文学院 陳濤講師：大衆文化專題	中国人民大学文学院 張一帆講師：戯劇戯曲学 日中学生交流会
11月15日	中日友好医院 見学	人民中国雑誌社 見学 王衆一編集長：中日メディアについて
11月16日	北京京劇院 見学 葉金援先生：京劇文化について	愛慕集団 見学 京劇『少年馬連良』 観劇
11月17日	新華網 見学	国能中電集団 見学
11月18日	法海寺 見学 徐玉良先生：中国書道について	五里坨民俗館 見学 陳飛先生：北京民俗について
11月19日	自由活動	北京出発・帰国

# 活動報告





# 不以既定形象判断国家的重要性

松尾健司

## 一、导言

我参加了从二〇一七年十一月十二号到十一月十八号举行的「深思北京」的项目。这份报告著述我对这次项目的感想。报告共分五章，第二章列举一些本次活动中的例子，对中国的多样性进行描述。第三章关于在中国受到改变与没有受到改变的事情，从经济、技术和文化方面进行分析。第四章是「深思北京」的感想。第四章由两点组成，一点关于看内容的重要性，一点关于借鉴他国的重要性。第五章是结论。

## 二、中国的多样性

### 地方

中国是世界上面积第三大的国家，其自然地理和气候类型也多种多样，形成地方风格。地方美食代表地方风格，因为食材和口味受到自然环境的影响。譬如，云南菜较多使用米线。吃饭的时候有人告诉我们，这是因为云南拥有不少优质的水稻资源，米线可以用于储存过剩的大米。

中国每个地方都有方言。南方人的方言和北方人的截然不同。口音的话题常常会拉近人们之间的距离。有个日本同学讲一口带着台湾腔的中文，他的口音总是桌上的热门话题。另外，我们遇到一

个带河南口音的厨师，他的口音特别重，所以我没听懂。这种语言上的差异也可以说是地方特色。

中国有多种多样的气候，对企业的营销策略有很大的影响。参观内衣公司爱慕时，我询问了如何依据区域性研发产品。我估计中国气候差异的作用会比日本的更显著。比如，哈尔滨刚进入冬天的时候，广州还是很热，内衣的需求当然也会不同。与此相比，日本人口集中在所谓「三大都市圈」，即东京及周边地区、大阪及周边地区以及名古屋及周边地区，但气候基本相似。爱慕的职员回答在这个方面还需要进一步发展，从公司发展战略上而言，目前的焦点还是区域性营销，现在主要通过调整发货的时期来适应需求。通过本次参观就知道，在中国营销应该具体考虑气候多样性要素。

### 城市与农村

来北京之前，我了解到城市和农村的发展差距是要进一步探讨的重要课题。这次活动在北京举行，我们只能看已经很发达的北京，但我还是取得了一定的收获。

如今，在社会福利上城市与农村之间的差距较大。根据日本厚生劳动省的报告（二〇一六），一般来说，城市居民可以享受比农村居民更充实的福利。为了实现「小康社会」，中国政府致力于完善的社会保障制度建设。十九大报告也强调要「坚持在发展中保障和改善民生」。我认为农村人口较多是中国政府重视社会保障的原因之一。虽然中国城市人口在二〇一二年超过农村人口，但是中国农村人口还是占中国人口的较大部分。而且福利差距很容易导致社会动荡。中国是受到农民的支持而建立的国家，所以政府不会忽略农村问题。

从另外的角度来看，农村还没发达，可以说仍然有经济发展的巨大空间。我们参观爱慕的时候，爱慕的职员说以前打算在越南修建工

厂，但是算起来不划算，所以取消了这个念头。她还有说中国内陆劳动力还是便宜。而且，我们参观国能中电的时候，负责人介绍说中国西部在节能方面需要进一步发展。如果沿海地区的企业给西部的发展做出贡献的话，可以实现邓小平的“先富论”。但与此同时，农民工问题也很重大，不能只是态度上乐观对待。

### 三、在中国受到改变与没有受到改变的事情

#### 受到改变的事情

这十几年，中国经济有了突飞猛进的发展，GDP早就超过了日本，成了世界第二大经济体。经济发展明显影响到人们的消费。比如，据BBC报道，今年双十一总成交额一千六百八十亿元人民币，也越来越国际化。人民大学的一个女同学说，她把手机拿在手里等到晚上十二点，居然一共买了十一件衣服。

中国技术革新发生着日新月异的变化。随着手机的大量普及，支付宝和微信支付等应运而生，已经成为了在中国生活中必不可少的工具，甚至把中国变成前所未有的不带现金社会。

中国文化也必然受到消费社会和技术发展的影响。但其影响不都是负面的。北京京剧院的叶老师为我们讲解说京剧应该吸收过去京剧没有的东西，把它当成营养。我认为这是指习近平在十九大所强调的文化创新。我听说，京剧历史上一直有进步。比如，有些京剧的乐器是从中国民俗乐器而吸收进来的。

而且，引进新技术来让人深入理解文化也是很重要的。我们看京剧的时候，放映字幕的装置（照片一）设在舞台的两边，以方便知道演员吟唱什么。京剧的吟唱与日常生活中的发音和词汇有所不同，因此连中国人也很难听懂。多亏字幕的帮助，我才能够知道戏剧的情节。

#### 没有受到改变的事物

值得注意的是，文化的本体应该保留代代相传。保留文化和文化发展不是互相排斥的关系。著名书法家徐老师为我们讲解说，只有掌握了传承下来的书法技巧，才能够创新。

为什么会有人要传授，也有人要传承技巧？我认为与人性具有的审美能力息息相关。不同时代都有不同的时尚，美的基准也会受到时代精神的影响。但文化的本体是经过漫长的时间而形成的，可以说是人们在悠久历史中把美凝聚出来的结晶。所以，人们自然而然要传承美。人民大学的徐楠老师说审美会让生活更加丰富多彩。我认为，美涉及到许多人的生活 and 思想，所以会给人启发。



照片一：鉴赏京剧。左边（红色的部分）看得到放映字幕的荧幕。



照片二：用文胸做的花。据说是为某部电影的拍摄专门设计的。拍摄于爱慕内衣博物馆。

## 四、深思北京<sup>①</sup> 的感想

### 看内容的重要性

这是我第五次来中国，这次特别感受到不以既定形象判断国家的重要性。

以前的我光看中国和日本不同的要素。中国的社会环境和日本不一样，有时候对我们日本人来说感觉很奇怪。我第一次来中国是二〇一四年夏天，当时最引起我注意的是到处都是大批共产党的红色标语。在日本的话，民间广告会代替标语。我隐约觉得，国家把老百姓生活监视和控制得相当强。标语上的题目也是很少在日本看得到的，例如民族和谐，这些词都不太耳熟。

但我来中国好几次后，通过和中国老百姓聊天、去很多地方，渐渐习惯上了以前感觉很奇怪的事情。一位在煤矿工作的中年人给我解释中国宇宙开发方面的成果，显得十分骄傲。一位卡车司机让我坐回到喀什，他虽然态度较为粗鲁，但却有深奥的人生哲学。他谈到了许多问题，但和中国政府的官方看法截然不同。通过这种经验，我认为，住在一个快速发展的国家，其感觉不同于住在日本，也发现国家无法完全控制人们所想。

通过这次活动，我再次确认到了中国人和国家并不随声附和。本次活动充满了很多和中国学生、企业人员以及政府机关人员交流的机会，尤其是和一般很难见面的人见到面，有益于我深入了解中国如何运转。我们参观新华网，接待我们的一位女士有日本留学的经验，对我们十分友好。她说，新华社应当是政府的喉咙，可是也要成为在世界上既可靠又著名的通讯社。她确实在中国社会环境的限制之内，想方设法地寻找同时能够实现宣传和报道的办法。

而且，这次活动让我见识到了中国企业已经成为了日本企业的好对手。对我来说，Made in China（中国制造）的形象一直都不好。大约十年前发生的食物中毒事件还留在我的记忆中。中国游客来日本购买日制家电，象征中国人对Made in Japan的信赖。但另一方面，最近中国企业的力量与日俱增。比如中国手机已经在日本市场上市了。这次我们参观了内衣公司爱慕和致力于环保的国能中电。爱慕开发了许多种品牌，公司楼里面甚至有展览厅和博物馆（照片二），看起来和日本企业的营销策略不相上下。国能中电的技术也很先进。尤其是在生物质能源方面的技术将来会进一步发展。回头看，六十年前，日本企业制作的产品质量臭名昭著。质量应该随着时间的推移而改进，否则企业会被淘汰掉。这两家企业以国内需求为基础而发展。现在中国西部还不发达，国内需求会继续增高。对于以国内需求为基础而发展的企业来说，还有很大的发展空间。

### 借鉴他国的重要性

本次活动让我见识到了借鉴他国的重要性。参观国能中电的时候，接待我们的一位男士提起了一个发人深思的问题：日本的力量何在？我认为从这个问题可以读出要借鉴日本经验的意愿。日本向欧美国家学习得比较多，很多时候可以读出要借鉴日本经验的对象。中国还远不如日本，这个说法应该看从哪个方面来说。比如，中国在电子支付等有些方面已经超过了日本。

我认为，日本可以借鉴和合作的方面是社会保障制度。社会保障制度需适应国家的经济发展和社会环境，所以每个国家都有不同的制度。日本已有既历史悠久又完善的福利制度，但是少子老龄化带来缩减福利开支的制度压力。因此，确保制度的持续性是当务之急。中国

正在努力实现覆盖全国的福利制度。公平的社会保障制度建设是个重要课题。

日本确实和社会保障方面比中国发达。但是，我估计两国少子老龄化的进展与中国城市生活水准的提高会产生两国互相借鉴和合作的环境。虽然日本和中国的环境不同，两国社会福利制度发展的历史也不一样，但是日本和中国现在都处于少子老龄化的局面。而且，北京、上海等大城市的生活水平可以说与日本相同甚至高于日本。另外，中国从来没有完善的全国性福利制度，反而可能会占优势。换句话说，在适合于少子老龄化的社会保障制度建设上，中国可以参考他国的制度。

中国医疗的商业化给我一些启发。参观中日友好医院的时候，我很清楚地感觉到一般病房（照片三）和国际部病房（照片四）的差异。国际部的挂号费和门诊费贵，但等待时间短，病房环境和医疗质量都很好。国际部的挂号费和门诊费都由国际部来决定，患者不能用医疗保险来报销。我感觉日本医疗制度看重公平性，而中国的医疗制度已经倾向于商业化。我不能说哪个是更佳的制度，可是，商业化的确是既降低耗资又提升质量的办法之一。日本应该吸收部分可以学习的制度。

另外，社会保险制度也值得借鉴。据国能中电的职员说，中国很多家庭夫妻都工作，社会保险只有覆盖工作人员，而不覆盖工作人员的家人。这个保险制度也许是为了适合中国社会环境而形成的，但对于正在推动“女性活跃”的日本来说，也可以学习。在日本一定薪水以下的配偶者没有必要缴纳社会保险费和养老金。很多人认为这个制度阻碍女性工作的意愿。中国的社会保险制度有可能有助于建设女性发挥最大力量的社会。

## 五、结论

本次为期八天的项目充满许多让我受启发的内容。一边对照过去中国旅行的见闻，一边见识新鲜事物，在北京的每一刻都学到了很多事情。中国这么大，仅仅八天的逗留不能完整地了解中国，但也给了我一些继续学习下去的动机。而且，我的专业知识还不够，使我难以深入地探讨有些问题。尤其是社会保障制度有关问题需要进一步努力学习。我要深入学习我的专业，还想再来中国看看。到时候取得的收获可能会更深刻。

最后，我要向周密安排本次项目的各位，深表谢意。



照片三：普通病房。全部关灯。于中日友好医院。



照片四：国际部。全部开灯。于中日友好医院

## 参考文献

- 《中国城市人口首次超过农村人口》(2012年1月17日), BBC, 2017年11月29日浏览 [http://www.bbc.com/zhongwen/trad/chinese\\_news/2012/01/120117\\_china\\_urban](http://www.bbc.com/zhongwen/trad/chinese_news/2012/01/120117_china_urban)
- 《进入新时代!习近平十九大报告全文》(2017年10月19日) 2017年11月29日浏览 [http://www.legallinfo.gov.cn/zhuanti/content/2017-10/19/content\\_7361418.htm](http://www.legallinfo.gov.cn/zhuanti/content/2017-10/19/content_7361418.htm)
- 「2016年 海外情勢報告」p.282 厚生労働省
- 《激情与速度 光棍节如何变身“双11” 购物狂欢?》(2017年11月12日), BBC, 2017年11月29日浏览 <http://www.bbc.com/zhongwen/simp/business-41956606>
- 《分析: 阿里巴巴天猫“双十一”为何能年年突破销售成绩?》(2017年11月12日), BBC, 2017年11月29日浏览 <http://www.bbc.com/zhongwen/simp/chinese-news-41958861>

## 中国から学ぶ、 伝統文化と国際交流への姿勢

戸田理沙

なぜ日本人は自分たちの文化をこんなにも簡単に捨てる事ができるのか。

こんな疑問を八年前、当時十二歳の私は抱いた。七歳から十二歳まで約五年間イギリスに住んでいた私にとって、数年ぶりに降り立った国の国民の文化に対する意識は異様だった。日本の首都である東京の街には、見渡すところ着物などの伝統的なものはない。友達に紹介された近所の人気があるお店に行ってもおかしな英語が書かれた西洋風のおもちゃや文房具ばかりで、折り紙や和柄のものは一切ない。フランス、イギリスとアメリカをぐちゃぐちゃに混ぜて無理やり日本という型に押し込んだ、そんな印象を受けた。もちろん今となっては日本の伝統が全く失われていない事を知っている。最寄りの駅のデパートでは振袖、浴衣といった着物が売られていて自分と同じ世代の若い人がよくのぞいている。アクセサリーを売っているお店では折鶴のイヤリングが人気商品として紹介されている。小、中学校や高校で毎年盛大にお祝いされる節句、子供の日や七夕。しかしそれらは多文化と融合し、現代社会に適応しようとしてきた中で原形を失ってしまったのではない。外国、特に西欧の文化を奨励する中、ひっそりとした存在になってしまったのではないか。そして、それが悪い事であるならば私はどうすればよいのか。こんな疑問をずっと抱いてき

た。

一年半近く前に初めて中国を訪れた時、日本との違いに驚いた。外国人から見れば中国と日本などほとんど違いがないかもしれないが、この差は何だ。単に言葉や文化の違いだけではなく、自分たちの国とその文化に対する違いが印象的だった。その時訪れたのは南京だったが、街中には伝統的な様式の建物があり、公園や大学内のそこら中で太極拳をする人がいる。交流した大学生のスマホのカバーケースがデイズニーなど西洋風のデザインではなく、漢字が書いてあったり、龍の模様があったりとこんな小さなところでも違いが出るのかと驚いたのを覚えている。そして今回の北京深思では、伝統を重んじつつ変わっていく中国の社会に対応する人にたくさん会う事ができ、思う事がたくさんあった。全てを書く事はできないので、ここには特に強く感じた事を述べる。

まず、伝統文化の尊重は人と人とのつながりで生まれるということだ。この時代、ニュースはスマホをみれば世の中がどう動いているかという事は簡単に知ることができる。好きな歌手の演奏も、テレビで生放送をみる事ができるかもしれない。北京で見た京劇でもそうだと思う。北京での一週間も終わりに近づいたところ、北京でやってみようと思った事は何かといわれて私と隣にいた「同学」は、迷わず京劇を見たいと答えた。結局時間が合わずその願いはかなわなかったが、そう言ったのは今回私たちに毎日付き添い北京という素晴らしい都市を紹介してくださった北京戯曲評論学会の皆さんのおかげだったと思う。私は中国に行く前に、ネットで検索して京劇を少しだけ見た事があった。しかしその時は京劇をアクトバティックでかっこいい舞台だ、という事しか思わなかった。しかし中国に行ってから、葉金援先生が生き生きと京劇の歴史やご自身の

体験を語るのを聞いたり、北京戯曲評論学会の方が町を歩きながら京劇の歌を何気なく口さんでいるのを聞いたり・・・京劇を愛している人たちに勧められて、またその様な人たちに囲まれた見た京劇は本当に素晴らしいもので、もし私が仮に一人で何気なく京劇を後ろの方の席で見ている、そのような感動は得られなかったと思う。



北京京劇院・見学（展示室・稽古室にて）  
京劇「少年馬連良」・観劇（長安大戲院にて）

また、中国、少なくとも私がこの一週間で見てきた中国は少数民族を尊重していると思う。たとえば人民中国は少数民族を紹介するコーナーを現在毎回設けて、外国人である日本人に対して中国人とは漢民族だけではない、という事を親しみやすかつ魅力的なイラストであらわしていた。同時に、彼らに対するステレオタイプが生まれにくいように細かい配慮もしている。少数民族の写真を紹介する際に、西欧式のウエディングドレスを着た花嫁の横に伝統的な服装をした母親とパーカーを着た妹の写真を選んだという話を聞いた。また、中国の政府が公の文章を発表する際、漢民族と少数民族を含めた表現を必ず使うそうだ。中国の政府が少数民族を大事にしている事が非常に良くわかる。

さらに、このプログラムでは、毎日いろんな地方の食事を体験することができた。横浜に住んでいる私からすると、中華料理といえば四川、広東料理といったものが真っ先に浮かぶ。しかし今回経験できたのは北から南までのさまざまな料理で、しかも毎回とても丁寧な「この料理はどういう材料を使って、このように食べるんだ」という説明までしていただいた。お店も一つ一つ違い、大きな美しいつぼが置いてある伝統的な作りのお店から、レトロで少し昔の中国を思わせてくれるような可愛くてあつとホームなお店まで、本当にたくさん種類の中華を知る事ができた。

世間では、中国はめまぐるしい発展と変化を遂げているという。しかしその発展の中でもこのように自国の文化や多様性を大事にできている。それは政府のおかげでもあるが、北京戯曲評論学会の人たちのような、個人個人のおかげであるのではないかと思う。思えば私は日本の伝統が好きだし、後世に残ってほしいと思う。しかし着物を買ってたまに着るくらいで、結局のところ日本文化を



広める活動をするわけでもなく、まるで日本に来た日本好きの外国人のような気持ちでいた。私がやらなくても私よりお金があってもっと関心がある誰かがやってくれる、そんな事を無意識に考えていたのではないか。忙しい中、京劇普及のため一週間も毎日毎日私たちの面倒を見てくれた人たちを前にして、今までの他力本願な考え方が本当に恥ずかしく思えた。

また、中国は昔ながらのものを大事にするだけではなく、変わりつつある社会にいつも適応としている。今回のプログラムで訪問することができた愛慕と国能中電は、両方とも一人の人が社会のニーズに合わせた事業を大きくしたものだ。愛慕に関して、形状記憶のフレームという一つの発明から女性の下着の会社をつくり、それを男性用、子供用と事業を広げ、さらには流行最先端の材料を使う美容製品やアメリカの大統領夫人が気に入るような高級ブランドも作り上げた。愛慕の会社では、社長自らが書いた書道作品が部屋いっぱい飾ってあったり、中国の伝統的な模様を取り入れた商品をつくったりしている。昔のものと新しいものを融合させて、素晴らしい商品を出している事に感動した。何を捨てて、何を残すべきか。そして新しいものにごうやってそれを取り入れていくのか。答えが曖昧になりがちなこの問いに対する明確なスタン

スが、素晴らしいと感じた。

また、このプログラムでは公式訪問という立場で参加したため、私のような学生が普通ではお会いすることなど到底できない人と会うことができた。そしてその人たちが私たちを丁寧に扱ってくださった事に、非常に感謝の思いでいっぱいである。中国力が拙い私でもそれぞれに中国そして日中関係について確固とした考えがあり、私たちに伝えたい事があり、そして時には口に出せない事があった事が良く分かった。もっとしゃべっている事がわかれば、さらに面白く、もっと聞いて学ぶ事ができただろう。この数カ月、もっと中国を勉強しなかった事が非常に悔やまれた。しかし中国を動かしている人々は日本で報道されているような日本が嫌いでマナーがない人ではなく、私たちのような学生までも一人一人の古い友人のように大事に扱ってくれる、洗練された人々であった。私がいくら拙い中国語で話しかけても、できるだけ理解できるようにと優しくゆっくりとわかりやすい言葉で返してくれた。次中国を再び訪ねるときは、もっとこの人たちといろんな事について語り合うだけの中国力をつけていたい。そう思わずにはいられない貴重な体験だった。

最後に、今回のプログラムでは国際交流に関してステレオタイプと報道される内容を鵜呑みにしないことが必要であるということ自身にしみて感じた。もちろんこれは今までに外国を訪れた時感じた事はある。日中国交がない時代から一般の日本人でも中国を知る事ができる窓としての役目を果たしてきた人民中国の編集長である王衆一さんが編集上、非常に気をつけているのは「イデオロギーとプロパガンダをできる限り排除すること」とおっしゃっていた。王さんとの議論を通してメディアがいかに外国のイメージに影響できるかという事を知り、また新聞やテレビのニュースで報道されている



事をすぐに信じるのではなく、自分の目で事実を確かめることの認識を再確認させられた。(王さんは特に日本のメディアの信憑性は薄いとおっしゃっていた。)

そしてそれを返せば自分の言動一つ一つが、日本人一般の行動として捉えられると思うと時々怖くなる。日本の事をあまり知らない人に出会った時、自分はこのような配慮をしながら、日本人という正しい国民像を伝えられているだろうか。日本語を流暢に話せない人に会った時、私はこの人たちのように辛抱強く、自分が誇れる日本という姿を伝えたい。この北京での一週間は、日常生活での、そして外国にいるときの自分の「日本を代表する一人」としての意識を見返す良いきっかけともなった。



## 文化、政治の中心・北京を訪れて

衛藤健

一、中国の多様性と、変わるものと変わらないもの

中国は広い。国土面積は九六三万<sup>平方</sup>キロ、日本の約二十五倍だ。だからこそ、その多様性は奥深い。中国人同士の会話で、「你是哪里人？」という言葉がすぐ飛び交うのもうなずける。日本で「出身は？」と聞くより、よほど面白いのだ。研修の中で出会った人たちの出身地はさまざまだった。北京、雲南、甘肅……。きつと北京と違う文化がそこにはある。そして各省・自治区の出身者は首都・北京に集まる。人の集まる場所は、同時に文化の集まる場所だ。



八日間の研修を通して中国の多様性を感じる機会があった。食事だ。北京料理はもちろん、東北料理、四川料理、雲南料理など各地の食事を口にした。それぞれの料理に特色がある。内陸で湿気のある四川の料理は他地方以上に発汗を促す辛さを感じたし、雲南料理は夏に訪れたベトナム料理との共通点を感じた。さらに、中国人民大学の中や北京市内の至るところに

「清真」の文字やアラビア文字らしき文字（上）が。ムスリム（回族）の料理だ。中国の多様性はその広さや歴史だけではなく、国内に五六いる民族や宗教も重層的に絡み合っ構成されているのだろう。

このように、「中国」を構成する要素は複雑だ。だからこそ、日本が西洋文化の受容によって変化した部分とそうでない部分があるように、中国にも変わりゆくものと、変わらないものがあるはずだ。まず大きな変化として捉えたのは、その経済成長や技術進歩の速さだ。北京市中心部、特にCBDにあたる地区には東京と同じように高層ビルが立ち並ぶ。そして中国ではキャッシュレス決済が急速に普及している。どんな店でもスマートフォンを用いたQRコード決済が可能らしく、途中で訪れた個人経営のスーパーにすら普及している。さらに、街中ではシェアサイクルを利用する人々が多く見られ、宿泊したホテルの周辺にも大量の自転車が置かれていた（左）。

このように、最新技術を取り入れることによつて、中国の風景は確実に変化を遂げている。日本と同様、これまでの伝統文化をどう維持するかが問題視されているように



もあつた。

変わらないものとして捉えたのが、その伝統だ。中国の文化は他民族の影響を受けることで変化を続けてきた。しかし「中国文化」の伝統は歴史を通じて脈々と受け継がれてきた。「中国四千年の歴史」と呼ぶにふさわしいものだといえるだろう。京劇についての講座や実際の鑑賞（左）はもちろん、人々との交流を通して中国という文化全体に通底する思想を感じた気がした。会話を通じてさりげなく感じる事ができた「伝統ある大国」の意識はその発露といえるかもしれない。



新演目「少年馬連良」

上演劇場・長安大戲院

## 二、中国の公式活動を通しての感想

中国は、日本人からすると異質な国だ。すべてが共産党の指導の下に動く国。そんな中国の人々がどのような考えを持っているのか、公式の見解はいかなるものか。「文化」を感じることに別に、この部分を感じ、あわよくば直接聞き出すことが個人的な研修の目的だった。

日本の報道やサイトを見ると、中国共産党による強権的な支配という側面ばかりが強調されているように見える。それは本当なのだろうか。北京を訪れると、確かに至るところに政治的なスローガンが躍る。空港には「一带一路」、書店には「新時代中国特色社会主義」、至るところに掲げられた「社会主義核心价值観」（次頁上）……。五年に一度の党大会直後ということもあつてか、中国共産党の存在を感じずにはいられなかった。さらに、日本人にとっては使い慣れたGoogleなどの国外サイトにアクセスできないことも、その存在をより強く感じさせた。

その支配を受けている中国の人々はどのように考えているのだろう。研修を通して何人かに直接質問してみると、概して「複雑な感情」だという。国外の一部サイトにアクセスできないなどの不便を感じることはあるが、経済成長という利益をもたらしたことは確かだ。

人民中国雑誌社（次頁下）を訪れたとき、中国政治に対する新たな視点を得ることもできた。編集長の王衆一さんは「日本は与党と野党が非建設的な議論ばかりを繰り返している。中国では建設的な批判や意見によって民主党派や少数民族の意見を共産党の政策に反映させている」と中国の「民主性」を強調した。私の中で「中国」と「民主主義」は対極にあるものだったので、少し意外だった。彼



创新 协作 敢为 善成

人民中国  
PEOPLE'S CHINA  
since 1953

の言う中国の民主性をそのまま鵜呑みにすることはできないが、確かに日本政治の問題点は射ている。

このように中国の人々が政治に対してどのような考えを持っているのか、実際に聞くことができた点で、今回の研修は個人的にも有意義なものだった。「伝統文化」を知る今回の研修で、それと対極にあるような「共産党」という存在について理解を深めることは決して無意味なことではないだろう。

今回の研修では、中国という身近で「異質」な国に対する理解を深めることができたと思う。特に、個人では訪れることのできない各企業や機関、会うことのできない人々と実際に中国語で交流することは大きな価値があった。しかし同時に、自分の中国語力の不足を感じる場面が多く

あった。これからさらに中国語をつけていきたいというモチベーション喚起の機会にもなったことは有意義だった。今後も、中国語能力の向上と中国に対する理解を深めていきたい。

最後に、今回の研修を実現していただいた諸氏、そして∞日間サポートしていただいた藤原先生と朱さんに感謝申し上げます。

## 現代社会における 伝統芸術としての京劇のありかたについて

村上陸人

### 一、中国の多様性と変わるものと変わらないもの ・変わるもの

北京京劇院を見学した際、葉金援先生に京劇の変化可能性について尋ねた。葉先生曰く、京劇は誕生以来200年の間、常に時代に合わせて変化してきた。現代の京劇が従来の形式に変化を加えるのは当然であるという。その晩は長安大戲院で『少年馬連良』を観たが、舞台装置に取り入れられた最新の技術に驚かされた。演者の声はマイクで拾われ、時にはエフェクトがかけられたうえで客席まで明瞭に届けられる。舞台後方には大きなスクリーンが設置されており、場面に合わせた背景イメージを映し出していた。照明にはおそらくLEDでも使われているのだろう、色とりどりのライトが舞台に彩りを添えていた。葉先生という時代に合わせた変化は、このような技術の効果的な利用も指していたのだろう。中国では現在、経済発展に伴い、目まぐるしい速度で技術革新が進んでいる。中国伝統芸術の代表ともいえる京劇も、技術革新の波から無縁ではいられないのだろう。日本国内では現代社会で伝統が廃れていく話をよく聞く。しかし現地で見られたのは、むしろ伝統芸術が現代のテクノロジーを効果的に利用する様子であった。

京劇における変化の要素は演目自体にもある。『少年馬連良』



エンディングでは後方のスクリーンに馬連良の肖像が大きく映し出される

は「原創少兒京劇」と呼ばれており、この作品が現代になってから新しく作られたものであることを示している。京劇院で展示室を案内して下さった方に聞いた話によると、毎年一本は新しい内容の京劇が上演されているようだ。演目を変え、新鮮味を保つことが、客を惹きつけるのに重要なのだという。芸術作品は受容されて初めて価値を持つのだとすれば、観客は芸術作品の重要な構成要素である。京劇はこの点を強く認識し、客の要望に応える工夫をしていると言えるのではないか。

京劇は表現方法、表現内容ともに絶えず変化させている。それでは、伝統芸術の伝統性、不変性、同一性とはなんであろう。

#### ・変わらないもの

葉先生は京劇院見学後の会食の席で、新たな要素を取り入れる際は、相応しい形で取り入れなくてはならないとおっしゃっていた。相応しさには二つある。一つは内的整合性ともいえるもので、新たな要素を劇の内容、時代設定に適した形で取り入れることである。例えば、紙幣がないはずの時代の劇を演じているときは、いくら面白くても偽札を使った演技を加えることはナンセンスである。もう一つは京劇のアイデンティティに関わるもので、一般人の実生活よりも高級な世界を表現することである。いくらリアリティに溢れていても、実生活の泥臭い描写をそのまま劇の中に入れることは許されない。京劇での表現は優雅でなくてはならない。いずれにしても、新たな試みをする際はその都度、それがその劇に相応しいか、京劇という表現に相応しいか吟味しなくてはならないのであり、何を変え、何を守るべきかを定める基準が決まっているわけではない。正しく吟味するためには、京劇をよく

理解していることが必要である。葉先生は講義の中で、京劇における理解とは、単に知識を持つことだけではなく、身をもって知っている、体得していることを指しており、得た知識は必ず実践によって確認され、身につけられなくてはならないと述べていた。

法海寺での徐玉良の講座で、書家の作品をいかに評価するかという問題に話が及んだ。作品の鑑賞を構成する要素である「格調」は、「神采」「气韵」「意境」に分けることが出来るが、このうち「意境」はイメージ、印象、連想のことである。一方、作品の評価は客観的でなくてはならず、個人的な好き嫌いに基づく独りよがりの評価は避けなくてはならない。この話を聞き、鑑賞の中にある主観的要素と評価の客観性が衝突することはないか、と疑問に思い質問した。曰く、両者は本来矛盾するものではなく、鑑賞も評価も学習により洗練していかなくてはならない。

上の二つの回答に共通するのは、芸術に対する謙虚な姿勢だろう。芸術はそもそも奥深い不断の探究であって、決まった基準や形式を覚えればマスターできるものではない。時代に伴い、また自分自身の成長に伴い、芸術を構成する要素は変化する。変わらないのは、芸術に向けるまなざしである。それは、芸術の伝統への敬意の念であり、自分はその道の学習者であるという意識である。芸術の同一性を保つ伝統は、自らその道に入り学ぶことで身につけることが出来る。変化の激しい現代において、芸術のあるべき姿を見極めるためにこそ、より広く深くその芸術について学ぶ必要があるのだろう。そしてこの探究への意欲こそが、伝統芸術としてのアイデンティティの根幹を支えているのだろう。

## 二、中国の公式活動を通しての感想

庶民の生活に直接触れる機会はないだろう、今回の研修に参加する前、私は行程表に目を通してそう感じた。文化人類学を学ぶ者として、これまで旅先にはできるだけ長く滞在し、そこに生きる人と生活実感を共有しようとして努めてきただけに、濃密なスケジュールに戸惑い、公式訪問の肩書を重荷にすら感じた。社会の上層部と下層部は乖離しているに違いない、上層部ばかりと交流しても社会全体の理解には至るまい、とそう決め込んでいた。

企業訪問、先生方の講義、交流会といった場では、彼らの活動と一般庶民の生活との関連について質問した。どの返答でも、組織としての活動を一般庶民の生活に関連付けることの重要性が強調されていた。とりわけ印象に残ったのは、国能中電の方々との会食の席での話だ。第十九回党大会での習主席の演説では抽象的な表現しかされていないが、一般庶民はそれを聞いて何を感じているのか、習主席が込めた意味を読み取ることは出来るのか、と尋ねたところ、中国における政府高官から一般庶民に至るまでの解釈の連鎖について説明して頂けた。どのレベルの組織にも抽象的な方針を具体的に解釈する人材がおり、それらは組織間で交流している。多重な解釈構造は社会全体に広がっている、とのことだった。

このような社会全体を見渡す視野は社会のリーダー層ならではのものだろう。リーダーたちとの交流は今回の研修のような公式活動を通して初めて可能になる。単独の旅では生活者に接近し、彼らの実感に触れることは出来ても、社会の上層にいて社会全体を見渡している人にアクセスすることは難しいだろう。今回の研修は社会のリーダー層の実感に直接触れた貴重な経験となった。



## 北京での活動を通して 何を見たか

三谷伶司

頤和園・十七孔橋

- 一、中国の多様性と変わるものと変わらないもの  
・「SNS、そして人と人のつながり」

中国において「変わるもの」として一つ注目したのはSNSの台頭による人と人のつながりであった。自分は中国の技術の進展とともに技術の人への影響に興味を持っていた。SNSはたしかに人々をつなげ、世界のどこにいても人と連絡をとれるようにしてくれた。しかし、便利さと引き換えにこのつながりは希薄になりがちで、これに苦しんでいる人は多い。また、毎日価値の低い情報を受け取らなければならなかったり、友達への即返信を求められたりと面倒なことが多い。中国では使うアプリやプラットフォームがアメリカや日本と違うため、SNSへの考え方も違うのだろうか、と疑問を持った。

中国での主要アプリはWechatである。Wechatとラインは似ているが、異なるところも多い。一つ目は友達追加についてだ。ラインでは見知らぬ人、知り合っていない人には自分のアドレスは渡さないが、Wechatは初めて会った人でもすぐに登録する。友達追加の考え方はどちらかというフェイスブックのものに似ている。自分はラインにおいて友達がまあまあいるかもしれないと思っていたのだが、友達のWechatの友達人数ははるかに凌駕していた。

Wechatには既読機能がないぶん、既読スルーなどのようなことに合わなくてすむが、ほかに人間関係で困るようなことはないのだろうか。どうやら今問題になっているのはメッセージを返信しないにもかかわらず、コメントには写真などをアップして未読スルーが明らかになっていることなどが若者の悩みだそうだ。また、Wechatをちょっと手放していた間にグループチャットなどで話が進んでしまい、置いていかれることを悩む人も大学、職場でとくに



多いそうだ。

これは日本においても同じことが言えるのだろう。大学に入ったり、職場に着いたりすると人数が多いためどうしても人間関係が希薄して、SNSでつながろうとするも空回りに終わってしまいうことがある。日本ではツイッター、インスタグラム、ライン、フェイスブックが主流であるが、このアプリたちのせいで私たちの生活が制限されているといっても過言ではない。自分もWechat、ラインで友達と話すのは好きだし、ツイッターで有名人の報告を見るのは好きだ。だが、ときにはSNSから離れたくなることもある。SNSから離れ、よりよい人間関係を築くにはどうしたらよいのか、まだまだ課題は山積みだ。



Wechat ロゴ



Line ロゴ

### ・「教育に対する考え方」

自分の印象に強く残った中国の変わらないもののひとつに、教育の重要視が挙げられる。孔子の頃から学習の大切さを心に刻み込まれている中国人の教育への考え方は日本人のものを超えると感じる。八月に南京に行ったときも感じたのだが、日本と中国の大学はまったく違う。日本は大学単独であるのに対し、中国の大学はまるでひとつの町のようにあり、スーパーから病院までほぼ



中国人民大学にて

すべてが完備されている。学生寮と言うにもかかわらず、毎日長い時間をかけて通わなければならない東大の三鷹寮とは学習環境が全く違うと感じた。アメリカは企業が科学技術の発展を引っ張って行くのに対し、中国では大学が導いて行くというのを聞いたことがあるが、確かにその通りだと感じた。また、授業にての生徒達の参加の意欲も驚かされた。私たちが一日目に参加した授業は文学の授業だったが、先生がひとつの詩、作品の一部分を引用しようとする、多くの生徒達は先生に合わせてその一部分を声に出した。このように先生が一方通行で授業をするのではなく、生徒たちも同じく参加する授業の型は東大では第2外国語の授業とその他とても数少ない授業でしかみられない。日本人と中国人の積極性の違いを目の当たりにした瞬間であった。

## 二、中国の公式活動を通しての感想

### ・「大学入学以降の自分について」

自分の考え方について説明するには大学入学当初に戻らなければいけない。大学入学後に中国語を学び始めたときの自分の頭の中はどうなっていたかと聞かれると、とても恥ずかしい気持ちになる。本来の「JTB」の目標である日本と中国をつなげ日中関係の架け橋となる人材になること、日本語、中国語、英語を仕事で使い世界中を飛び回る人材になること、などの像はまったく頭の中に存在しなかった。どちらかというと、いや、ほぼ完全に、自分は受動的な姿勢であった。中国語を学べるプログラムがあるならまあやってみてもいいのではないか、できるところまでやってみよう、という感じであった。消極的な姿勢であったため、当然授業の内容の飲み込みは遅かったし、なかなか中国に魅力がわかなくなまま一年目を過ごしてしまったように感じる。プログラム通りでやっていたら中国語も「いつかは」うまくなるのだろうと中途半端に信じていた典型的な受動的な人間であった。

しかし、中国人との交流プログラムを通して中国人の友達を作ったり、クラスメートがいつのまにか中国語がすごくうまくなっている姿に驚き危機感を感じさせられたりする中で、少しずつ中国語、中国の文化、そして現在の中国の状況についてやる気が湧いてきた。この少しづつがあまりにもゆっくりであったのが今では悔やまれるが。春休み、そして夏学期を通して中国人の中の良い友達を増やしたり、夏休みに南京に行って初めての中国渡航を経験したりする中で、能動的に学んで行く姿勢が身について

きた。

以上のように、少しずつ自分の学習態度は向上していったわけだが、今回の北京研修においては自分の学習態度はどうだったであろうか。企業訪問などを通して、自分は相手側についてもっと知ろうという姿勢は見せようとはした（拙い中国語で、しかもときどき質問の内容がつまらなすぎるのではないかと思うことはあったが）。中国と日本の違い、中国において仕事をするにあたってどのような障害があるかについて主に質問を考えた。聞き取れたかはまた別として、学べるものはあった。

だが、学んだものは本当に価値あるものだっただろうか。よく考えて見ると、Baiduで調べたり、本などに書いてあるようなことについて聞いてしまったりしたように感じる。要するに、もっと準備できるところはできたはずだった。人民中国などであれば、日本と中国に関するメディアについての本を一冊読み、それについての意見、そして質問を用意していけばよかった。そのような意味で準備が全く足りていなかったし、内容を浅くしか掘り下げることでできなかった。自身の教養のなさが企業訪問を通して浮き彫りになった。

ではそれに比べ人民大学との交流はよかったか、と言われるとこれも自分に不満がある。なぜかというと、自分の国の文化を説明できなかったからである。中国語で自分の大学生活や家庭での生活などについては話すことができたが、源氏物語、枕草子などの文学について質問を投げかけられた時、しっかりと答えることができなかった。この文学の面白さはどこにあるのか、なぜ歴史を通して愛されているのかについては日本人として知っておくべきなのに、日本語ですら説明できないことに気づいてしまった。それに比べ、人

民大学の学生達は紅樓夢、水滸伝について楽しそうに語ってくれて、自分の教養の浅さを再び痛感することとなった。彼らは文学部の生徒で、自分は理系の学生というのは甘えで、習近平の「文化自信」のように自分の学んでいることには関係なく、母国の歴史や文化の基礎事項については自信を持って説明できるようにすべきだと感じた。

また、自分で自分を理解していなかった。将来の夢は何か、また専門過程では何を学びたいか、と聞かれることが多かったが、他の東大のメンバーに比べて自分はまったく指針が定まっていないう人間だと気づかされた。中国人の歌手などは好きなので、その歌手などを話題に話すことはできるが、この歳にもなつて社会にどのように貢献するかビジョンを持たずに未だにぼんやりと過ごしているのはいけないことだと罪悪感を感じた。

これから先は人工知能の時代となり、翻訳、通訳の必要性はさらに下がると世界中で言われている。中国でもそうであり、人工知能の分野だけでなく、ドローンなどの開発も進んでいるのを新華社で見学させていただいた。人工知能の発展が進むと自分の価値はどこにあることになるのだろうか。今の自分のままでは日本語、英語、がしゃべれて、ちょっと中国語ができるただの学歴の高い社会人となってしまい、人工知能に代替可能な存在となってしまうだろう。社会に貢献するには、語学だけでは足りない。自身の教養と自分の武器となる何かが必要である。しかし、今の自分には教養は足りないし、これといった武器もない。自分が社会にどのよう貢献できるかのビジョンを早急に考えて行くべきだと感じた。

## ・「日本と中国のメディア」



新華網にて



人民中国にて

日本と中国のメディアの違いについては人民中国にて初めて知ることが多かった。もともと日本のメディアは世界的にもレベルが低いことは知っていたが、外国のメディアと比べることについては聞いたことがなかったのも参考になった。日本のメディアは政治への圧力に弱く、それは記者クラブが存在するせいであるとされている。記者クラブは本来公権力に反抗することができるとされる組織である。しかし記者クラブが大手マスコミの記者などのみしか受け入れず排他的なため、取材の障壁とも海外メディアからは思われている。

中国に行くのは今回が二度目であったが、やはり自分の中国への考え方は日本のメディアに影響されているものが多いと感じてしまった。日本で中国について取り上げているニュースの多くはやはり中国の海賊版の映画や空気の悪さなどのネガティブなイメージを与えるもの。自分だけでなく、周りの日本人の友達、親戚、そして北京市以外の中国人の日本在住の友達に北京は空気を付けてね、と幾度も言われた。国内ではラインやフェイスブックを使えない

め、自由が制限されている、などの印象が与えられている日本人も多い。しかし中国へ実際に行くと、空気はたしかに思っていたほど汚くはなかった。何より外国人の多さに空港などでも気づかされた。一時期は中国への外国人観光客が減少しているそうだったが、北京市内を歩いていてもそのような感じはなかった。人民中国でも話題となったが、日本のメディアの報道はやはりネガティブなことについておおげさという傾向がある。

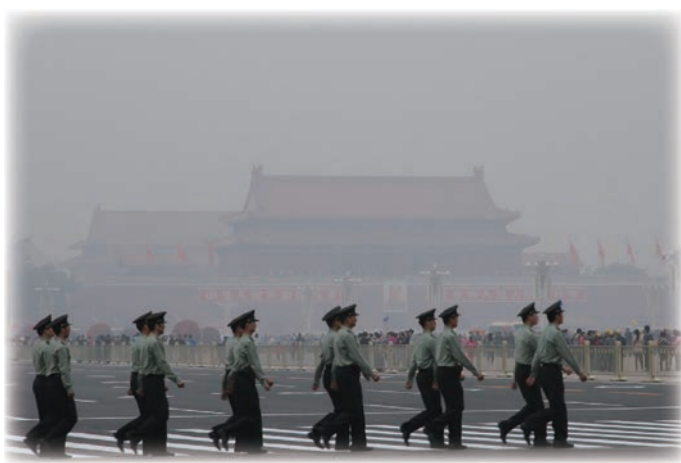
しかし、そうはいつても中国のメディアはどうなのだろうか。また、一般の中国人は中国をどのようにとらえているのだろうか。どちらかという中国人のほとんどは中国の未来を楽観視しているように感じられる。これからは中国の時代である、中国は繁栄する、などのようなフレーズ、またそれを感じさせる言葉を何度も耳にした。国電なども自分たちの中国への貢献を語り、中国の環境保全は進んでいることを私たちに話してくださった。国電はもちろんビジネスなので、良い結果を報道していきアピールすべきなのはわかるが、インターネットで検索すると汚染水や空気の問題についていくらかでも出てくる。

中国と日本は規模が人口の方面、国の大きさ、そして民族の多さからして全然違うため、捉え方がまったく変わるということに気づかないといけない。背景が違うため、もちろん作る政策なども変わってくる。王編集長もおっしゃっていたが、やはり実際にその業界に入って何年か経験して見るのが良いのかもしれない。

### ・「人間と自然の共存について」

人間と自然は共存することはできるだろうか。自分はこのプロ

グラム悪いと思っっているわけでもないし、存分に楽しんだつもりだ。またこれは中国だけでなく世界各国のことについて言えることだ。自分が何を言いたいのかというと、生活において無駄がとて目立つことである。プログラムで毎晩夕食を食べる時にでくる大量の食べきれないほどの食べ物、しかもほとんどが高級食品。これらを残して帰るのはとてももったいない気分になった。朝はバイキングでおいしいものをいくらかでもとれるが、ホテルの客が食べきれないものはおそらく処分される。中国の都市と農村の格差はとて大きいと聞いているため、この残した食べ物をなんとか農村に届けられないのか、と考えさせられることは少なくなかった。



霧がひどい時期の北京



環境汚染問題

もちろん中国の習慣だけが悪いと言っているわけではない。日本でもたくさん資源、エネルギーの無駄が生じている。自分が今部屋に一人でいるにもかかわらず暖房をつけてレポートを書いているのも、エネルギーの無駄と考えられるし、挙げ始めるときりがない。日本のコンビニからの廃棄物からも大きな問題だ。コンビニにて、賞味期限がきたものはまだギリギリ食べられるにもかかわらず捨てられる。パン工場などではパンの耳を食べる人は少ないという理由で耳を切り落とすすべて処分する、などのことも聞いている。また家畜一匹を育てるために必要とする水、そして飼料でたくさんのおいしい子供達を救うことだって可能だ。

現在はこのように豊かな生活を送っているが、人口の急激な増加を考えると私たちは五十年後、百年後も同じような生活を送っているだろうか。資源が果てたとき、一番被害を受けるのは人口が多い中国、人口密度が高い日本の都市圏などだと思う。

自分はすべての人間が肉を食べるのをやめて贅沢な生活に終わりを告げるべき、と言いたいわけではない。だが、このように食べ物、資源、エネルギーを浪費することに対して私たちは危機感がある程度持つべきなのかもしれない。自分自身もどのような方法がよい節約の方法なのかについて専門家であるわけでもないし、良いシステムを考えあげているわけでもない。

自分はすごく恵まれている環境にいる。他の自分の世代ではもうすでに低賃金労働を何年も経験し、今も毎日働いているような人がいるのにもかかわらず、自分はこのように勉強、またはなんでも好きなことをやるために4年間の大学生活というものを与えられている。日本では当たり前とされていることだが、中国の農

村などの子供達にとっては夢のようなことなのだろう。戸籍と今の貧困の生活を抜け出すために毎日がんばっている子供達に自分は向き合えるほど努力をしているかを考え直さないといけない。このプログラムを通して、自分がどのようにこれからを過ごして行くかを考える良いきっかけになった。

# 日本人から見た 中国文化の魅力についての考察

## ―研修で見たもの聞いたものを中心に―

石川和綺子

本レポートでは第一に「中国文化の多様性、変わるものと変わらないもの」について、第二に「一週間の経験による自分の考えや視点の変化」について述べる。

まず、中国の「多様性」「変わるもの」「変わらないもの」について述べたいと思う。

私は以前から中国の多様性は日本での伝えられかたに現れていると感じていた。私の中国語の先生や中国に留学した友達はもれなく、中国に深い関心と愛着を表明している。一方で一部のインターネットや新聞が中国を「爆買い」や「大気汚染」といった好ましくないキーワードで語るのを耳にすることがある。

このように日本人が中国に対して抱くイメージは多面的である。私の分析によれば、中国と具体的なつながりを持つ人はよく言うが、よく知らない人々が中国をよくないイメージで語る。中国に知悉すればそれだけ中国に愛着を抱くようになるという興味深い現象が起きているようである。

私にはそれが不思議だったので本研修に参加し、北京文化を深思し、中国の魅力について考察した。今回の研修で中国の魅力について語るとすればキーワードは「多様性」「変わるもの」「変わらないもの」の三つになると思われる。



まず研修で感じた多様性について述べる。本研修で、私は書家の方から環境保護に邁進する社長まで、多様な人にお会いすることができた。考えていることは皆それぞれ違った。例えば書家の先生は「書と中国哲学の関係」について含蓄のあるお話をなされた。環境保護を目指す国能中電の社長は「環境保護と企業としての成長をどのように共存させるか」について思想的、戦略的に卓越した意見を講演いただいた。これらの活動を通して中国社会の各方面のトップを走る人々の生の声を聞かせて頂くことができた。そこで感じたのは中国社会の多層性であり、それ自体が貴重な経験となった。

そして中国社会が多層性であるだけでなく、同じ場所にいる人々もまた多様であった。北京には中国各地から人が集まると大学での交流で実感した。人民大学では北海道以北の黒竜江省出身の学生から、沖縄県以南の広東省出身の学生まで、多様な学生と交流することができたのである。彼らの言葉の使い方や捲舌音などから中国の言語的多様性を感じた。また言うまでもなく食文化も多様であった。

多様性に関する中国の魅力は、中国がその多様性を受け入れることである。十九回党大会で習近平国家主席は「文化に自信を持つこと」を目標としてあげた。『人民中国』

の王衆一編集長に伺ったところ、この「文化」とは北京や漢民族の文化にとどまらず、中国各地の様々な文化を指している。その文化を尊重し、保全することが中国の方針だという。

翻って日本は多様性を排除しているのではないか。数年前だが、ある青森県出身の大学生が東京の会社に就職して、標準語を話すよう命じられた話を聞いたことがある。その人は標準語が身についたと認められるまで主要な営業には携わることができなかったという。東京から青森までの距離は北京から青島と同じくらいである。中国の規模で考えれば、東京と青森は近いと言えまいか。多様性を受け入れることについて、日本は中国から学ぶところが多いだろう。

次に「変わるもの」について話したい。私が初めて北京に来たのは六年前であったが、この六年で北京は大きく変化した。暮らしが目に見える形で便利になったのである。そしてこの変化に応じて人々の考えも変化したように思う。高速鉄道の拡充や高速宅配便の普及による運輸の発達は街を歩いていて目を眩るものがある。それだけでなく、スマートフォンを利用したキャッシュレス化は日本よりも格段に進んでいる。今や現金なしに外食することも、道端の公共自転車を利用することも可能であるのだ。

こうした変化に伴い人々の考えも変化したようである。十九回党大会で習国家主席は「民生」つまり人民の生活を目標に掲げた。そして国家の首脳だけでなく、実業界も人民の生活の向上を目指している。先ほども述べた国能中電は企業活動を通して環境汚染の改善を目指している。また中国下着の最大のメーカーである愛慕に話を伺ったところ、乳房切除術を受けた女性癌患者に専用の

補助具を無料で提供するなどの慈善活動を行っているそうである。こうした社会貢献活動を行う会社は中国で増えているという。

このように中国はより良い生活に向けて前向きに変化している。経済縮小に直面して久しい日本の一国民として、この活気を好ましく感じた。

最後に「変わらないもの」について述べる。中国の「変わらないもの」、それは日本との人的、文化的交流である。六年前北京に行った時と同様、日本の文化と言葉に関心を持ってきている人々と出会うことができた。人民大学では多くの学生が日本に興味を持って集まってくれた。ある学生が「永井荷風のあめりか物語と柳田國男の遠野物語を読みたい」と話すのを見て、中国に日本文学にこれほど関心をもつ人がいるのかと感激し、自分ももっと中国について学びたいと思うようになった。また北京戯曲評論学会のかたにお話を伺った時「日本には独特の文化がある。例えば茶道は現在の中国のものとは違う。また香道は日本独自のものだ。」とおっしゃるのを聞き驚いた。私は日本文化を中国の模倣に過ぎないと正直考えていたので、中国のかたからそのような話を頂き大変嬉しかったのである。このように文化に対する相互の理解と尊敬はこれからも変わることなく続くだろう。

書家の先生にお話を伺った時、私は「最も美しい書を見た時、先生はどのようなイメージを抱かれますか」と質問した。先生は「一種の愉快な、リラックスした感覚がある」とお答えになった。これは道家の無為自然と通じるところがあり、日本人にも馴染みが深いものである。私にも直感的に理解することができた。このように日中は文化的底流を共有しており、相互理解の基盤は変わらずに残る

だろう。

最後に「一週間の経験による自分の考えや視点の変化」について述べる。

私は研修以前、中国の制度がおしなべて平等を志向して作られているだろうと考えていた。中国が共産党政権だからである。日本の方が資本主義を掲げている以上、制度に「格差」を容認する傾向が強いだらうと想像していた。

しかし、日本の方が平等志向であると思える面があり、驚きだった。それは中国の病院を見学した時のことである。

我々は中日友好病院を訪問した。この病院は国家の管轄の病院である。意外なことに外来が二種類あるが、一つは普通の外来で、もう一つは待ち時間が少なく、質の高い医療を受けることができる外来である。後者の方が料金が高く設定されている。病棟にも同様の区別がある。また、医師の水準も三つあり、一番水準の高い医師の診察を受けるために、並みの医師の数倍の診察代が必要である。

このような、受けられる医療サービスの違いが日本の国立病院にはない。日本の国立病院は外来、病棟、医師の診察料がみな同じである。台湾の国立病院を訪問した経験があるが、日本と類似の料金体系を取っていた。そのため中国の制度が新鮮だった。

考えてみれば、中国は国土が広く、人口も多いので全国民に一律な制度を当てはめることは困難なはずである。しかし、私は共産党の一党独裁という政治の形から、勝手にみんなが同じ制度の適応を受けているのだろうと勝手に思っていた。特に医療制度は日本が国民皆保険に代表されるように、皆が一律に医療サービスを受けられるように設定されているから、中国は更に平等なのだろうと

思っていた。実際の中国は制度上も多層的であることが分かり、中国のイメージが大きく変化した。







### 東京大学の学生が中国発見の旅

jp.xinhuanet.com | 発表時間 2017-12-02 17:23:24 | 新華社 | 編集: 陳辰

小 中 大

【新華社北京12月2日】日本の東京大学の教師、学生で構成される「深思北京」交流団が北京訪問を終え、日本に帰国した。わずか1週間の学習見学だったが、学生たちは多くのことを感じ取ったようだ。簡単な言葉からも、より立体的でより色鮮やかな中国が彼らの目の前に広がっていたことが分かる。

今回の活動の主催者であり、東京大学教養教育高度化機構国際化部門長の刈間文俊教授は今回の活動に対する最初の願いについて、「今回の活動の北京運営者である北京戯曲評論学会の新飛会長がおっしゃる通り、『日本は改めて中国を知る必要があり、中国も改めて日本を発見する必要がある』。教育者として私は、人材に触れることは芸術作品に触れるのと同じく、若い時に機会が多ければ多いほどよく、人の一生に影響すると深く感じている。このため、両国の若者の交流を強化することは、両国の民間交流に役立つだけでなく、若者自身にとっても、視界を広げ、より優秀な人材に触れるよい機会となる」と語った。

東京大学は株式会社ゼンショーホールディングスの援助の下、4年連続で「東京大学・中国学生交流プログラム」を展開している。このプログラムは日本の学生が北京を訪問し、踏み込んだ交流を実施するのを支援する一方、中国の南京大学の学生が東京大学を訪問して交流することも支援している。

#### 推薦記事

政治 / 経済 / 社会

- ・ 習近平主席、香港の林鄭月娥行政長官と会
- ・ 李克強総理、韓国の文在寅大統領と会見
- ・ 中国の医療船「和平方舟」が東ティモール
- ・ インドネシア・西ジャワ州でM6.9の地震
- ・ 「重慶大爆撃」民間賠償請求訴訟団、東京

#### 注目ランキング

- ・ 安徽省黄山で初雪 一面銀世界に
- ・ バンクーバーで中国ランタンフェスティバル
- ・ 杭州の書店にAIロボ登場
- ・ 湖北省恩施自治州、初雪迎える
- ・ 棚田に雪化粧
- ・ 山東省青島市、冬の海の幸が満載
- ・ 「無人コンビニ」が中国瀋陽に登場
- ・ 学校で伝えられる伝統文化、太極カンファレンス
- ・ 河南省漸川県の丹江口ダム、冬の景色

中国网 Japanese.CHINA.ORG.CN

### 中国人民大学文学院「学院新聞」2017年11月16日付記事

<http://wenxueyuan.ruc.edu.cn/article/?3912.html>

中国人民大学文学院「学院新聞」では、私たちの2日間にわたる人民大学への訪問と活動内容が詳細に取り上げられている。両大学が交流を深めた様子が伝わる内容となっている。また、東京大学教養学部が設立した、日中英三カ国語ができる人材を目指すトライリンガル・プログラムについて言及されている。

News & Notice  
新闻公告

- > 新闻
- > 公告
- > 学术动态

#### 【交流】日本东京大学第四届“深思北京”学生访华团访问我院

发布时间: 2017/11/16  
标签:

11月13日至14日, 日本东京大学藤原优美老师率领第四届“深思北京”学生访华团访问我院。我院党委书记兼副院长朱冠明、副院长徐楠楠接待了访问团一行。本次回访东京大学的领队杨联芬教授、党团学办公室主任黄彦菲、外事秘书罗观参加了接待活动。



## 現地メディアによる報道

現地メディア「新華網」・「新華社」と中国人民大学文学院「学院新聞」による、北京研修についての報道を紹介する。総じて、日中両国の相互文化理解を促進するといった意義が評価されている。

新華網北京 2017 年 12 月 1 日付報道記事

[http://www.xinhuanet.com/world/2017-12/01/c\\_129754640.htm](http://www.xinhuanet.com/world/2017-12/01/c_129754640.htm)



比新闻离你更近

## 东京大学学生的中国发现之旅

2017-12-01 17:22:43 来源: 新华网



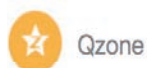
关注新华网



微信



微博



Qzone



0  
评论

新华网北京12月1日电（记者郭丹）“法海寺的壁画真漂亮，让我感受到了中国几百年前艺术的奥妙”“没想到中国的媒体如此发达，日本人确实应该更重视新华社”“中国环保行业前途广阔，国能中电集团很厉害”……

由日本东京大学师生组成的“深思北京”交流团已结束北京之行回到了日本。但短短一周的参观学习、学生们感受颇深。一段段简短的话语可以看出，一个更立体、更鲜活的中国展现在了他们的面前。

本次活动的主办者、日本东京大学教养教育高度化机构国际連携部部长刘间文俊教授在谈到本次活动的初衷时说：“正如本次活动北京承办方——北京戏曲评论学会会长靳飞所言，‘日本需要重新认识中国，中国也需要重新发现日本’。而作为教育者，我深有感触：接触人才与接触艺术品一样，年轻机遇越多越好，会影响人一辈子。因此，加强两国年轻人的交流，不仅有利于两国的民间交流，对于年轻人本身而言，也是开眼界、与更多优秀人才接触的好机遇。”

据悉，东京大学在日本泉盛集团（ZENSHO）的资助下，已连续四年开展了“东京大学与中国学生交流项目”。该项目一方面支持日本学生赴北京进行深度交流，一方面也支持中国南京大学的学生来东京大学交流。









執筆者一覧（50音順）\*所属は2017年11月現在

石川和綺子（いしかわ わきこ） 医学部健康総合科学科3年  
衛藤健（えとう たける） 教養学部2年  
戸田理沙（とだ りさ） 農学部獣医学科3年  
松尾健司（まつお けんじ） 法学部4年  
三谷怜司（みたに れいし） 教養学部2年  
村上陸人（むらかみ りくと） 教養学部文化人類学コース3年



中国人民大学國學館にて



## 2017 年度中国語上級・北京研修——深思“北京”

### 協力

中国人民大学文学院  
北京戯曲評論学会

### 引率教員

藤原優美 グローバルコミュニケーション研究センター TLP 中国語 特任講師

### TA

朱芸綺 総合文科研究科超域文科科学専攻博士課程

### 担当

#### 東京大学リベラルアーツ・プログラム (LAP)

白佐立 教養教育高度化機構特任准教授  
新田龍希 同上特任助教  
根岸理子 同上特任研究員  
岩川ありさ 同上教務補佐員

#### 東京大学トライリンガル・プログラム (TLP)

刈間文俊 総合文化研究科超域文化科学専攻教授  
石井剛 総合文化研究科地域文化研究専攻教授  
阿古智子 総合文科研究科国際社会科学専攻准教授  
菊池真純 グローバルコミュニケーション研究センター TLP 中国語 特任准教授  
藤原優美 同上特任講師  
李彦銘 同上特任講師  
白春花 同上特任講師

### スタッフ

青井亭菲 教養教育高度化機構事務補佐員

本研修は、東京大学 TLP 学術奨励金及び株式会社ゼンショーホールディングスの寄付金による支援をいただいて実施されました。

### 深思北京

2017 年度中国語上級・北京研修報告集

2018 年 3 月初版印刷

編集 / 装幀 朱芸綺

発行 東京大学リベラルアーツ・プログラム

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

TEL 03-5465-7671

URL : <http://www.cgcs.c.u-tokyo.ac.jp/tlp/zh/index.html#four>

E-mail : [tlpchinese@cgcs.c.u-tokyo.ac.jp](mailto:tlpchinese@cgcs.c.u-tokyo.ac.jp)

表紙写真 : by Zhao Ding

